

近代小説における助数詞「回」「度」「遍」の一考察

陶 萍

1. はじめに

日本語の助数詞には「モノ」(物体)を数えるものもあれば、「コト」(行為)を数えるものもある。例えば、具体的な物を数える「冊」「枚」「本」などは前者にあたる。一方、動作・行為の回数を数える「回」「度」「遍」は後者にあたる。本稿は後者の「回」「度」「遍」に注目し、その相違を検討したい。検討する前に、まず、『日本国語大辞典』(第二版)の接尾語としての定義を参照する。

「回」 数または順序に関する語に付いて、回数を表わすのにいう。

「度」 回数を数えるのに用いる。たび。

「遍」 動作、作用の回数を数えるのに用いる。かえり。度。回。

このように、辞典では接尾語として「回数を数える」と定義しているが、「回」「度」「遍」の詳しい差異には触れられていない。本稿は意義素の視点から近代の小説における使用状況を通して、三者の共通点と相違点を明らかにしたい。

2. 先行研究

実体のある事物を数える助数詞に関する研究は多数あるが、「回」「度」「遍」のような動作・行為を数える研究はほとんどなされていない。その中で、代表的なものとして飯田朝子(1999)と伊藤由貴(2011)が挙げられる。

飯田氏は新聞のデータベースを検索し、「回」と「度」は基本的に重なる部分が多いが、置き換えられない場合もあるとしている。「回」と「度」の比較は以下の通りにまとめられている。

- a. 「度」は接頭辞の「第」や「全」等と共起することができない。
- b. 「回」が小数及び0と共起するのに対し、「度」は小数及び0と共起することができない。
- c. 一定の期間内における行為の頻度や繰り返しを数える場合に「回」で数える。
- d. 行為の反復が不確定な場合、或いは反復が不規則な場合に「度」で数える。

その他、飯田氏は行為の連続、行為の合計数、分割数を言う場合は「回」が好まれるとし、その例として「～連続(して)、～続けて、(合)計～、～にわたって、～に分けて、～ずつ、～につき、～あたり」を挙げている。いずれの場合も「回」の出現数が「度」を上回っていたと指摘している。

一方の伊藤氏は中世までは一般的な助数詞ではなかった「回」がどのような過程を経て「度」と並び使用されるようになったのか、その受容について考察している。また、近代の「回」について、『明治の文豪』(新潮社)に収録された小説を調べ、「回」と「度」の使用頻度が1:20と大きく「度」に偏っていると指摘している。

先行研究をまとめると、飯田（1999）から分かるように「度」には接頭辞の「第」や「全」、「小数」、「0」と共起できない使用制限があり、「回」の方が広く使用される。また、「回」と「度」を比較すると、「回」は規則的に継続・反復する性質の強い行為を数える助数詞である。一方の「度」は、定期的に継続・反復されなかったり、次回の行為を予測するのが困難な行為を数える助数詞である。しかし、飯田氏は新聞の用例が少ないため「遍」を調査対象から外している。また、伊藤（2011）では、近代の「回」について『明治の文豪』を用いて考察し、近代の小説においては「度」の使用に偏っていると述べているが、「回」と「度」の使い分けにはあまり言及していない。

こういった状況を受けて、本稿は新聞とは性格の異なる小説を調査対象とし、先行研究に触れられなかった「遍」を「回数を数える」助数詞として加え、「回」「度」「遍」の意義素を対照的に検討したい。

3. 調査方法

本稿は先行研究を踏まえ、夏目漱石¹⁾の小説における「回」「度」「遍」の使用状況を概観し、その後、使用頻度・数詞との共起・意味分野から、三者の意義素及び使用傾向を考察する。また、コロケーション（文脈上における他の文要素との共起関係）の観点から用例を分析することによって、似たような「回数を数える」助数詞に存在する微妙な意味の違いやニュアンスの相違、或いは用法上の差違といったものを明らかにしたい。

調査範囲：『新潮文庫明治の文豪』（CD-ROM版）所収夏目漱石の24作品を調査対象とする（作品名は表1を参照）。

4. 調査結果と分析

夏目漱石の24作品における「回」「度」「遍」の使用状況を表1にまとめた。以下、4.1で全体の様子を概観し、4.2で数詞との共起関係、4.3で意味分野、4.4でコロケーションの観点から三者の意義素を考察する。

表 1：各作品における「回」「度」「遍」の使用頻度

作品	総文字数	回	助数詞 以外の用法	度	助数詞 以外の用法	遍	助数詞 以外の用法
我輩は猫である	371843	16		54	副詞 15	10	副詞 1
明暗	363613	1		59	副詞 31、慣用 1	22	
行人	253875	1	慣用 1	56	副詞 7	22	副詞 1
それから	241317	1		42	副詞 2、慣用 2	42	副詞 1
虞美人草	238610	0		36	副詞 9、慣用 2	24	
彼岸過迄	227740	2		46	副詞 10	20	副詞 1
こころ	184898	3		43	副詞 7	15	
三四郎	178953	0		22	副詞 9、慣用 1	0	
道草	167058	2		48	副詞 6、慣用 3	14	副詞 1
坑夫	165383	5		34	副詞 10	11	副詞 1
門	163548	5		47	副詞 5、慣用 1	7	副詞 1
野分	108750	0		21	副詞 5	7	
草枕	106815	0		10	副詞 2	3	
坊っちゃん	104126	0		18	副詞 3、慣用 1	8	
永日小品	60955	4	慣用 1	16	副詞 4、慣用 2	8	
趣味の遺伝	45721	0		7	副詞 9	1	
二百十日	34063	0		5	副詞 4	3	
幻影の盾	27395	0		1	副詞 8	0	
薤露行	25532	0		6	副詞 1	0	
琴のそら音	24845	0		2		1	
倫敦塔	20481	0		5	副詞 1	0	
夢十夜	19854	0		1	副詞 3、慣用 1	2	
文鳥	12969	0		5	副詞 1、	0	
一夜	8610	0		0	副詞 2、	0	
合計	3156954 字	40	会話文 17 地の文 23	584	会話文 75 地の文 509	220	会話文 90 地の文 130
比率		5%		69%		26%	

4.1 各作品における「回」「度」「遍」の使用状況

表 1 によると「回」「度」「遍」の使用回数はそれぞれ 40、584、220 例である。新聞においては「回」が最も多かったという調査結果が出たが、夏目漱石の小説においては「度」の使用が最も多い。この点は伊藤（2011）の調査結果と合致している。また、地の文・会話文における三者の出方を比較した。さらに、副詞や慣用用法など助数詞以外の用法も採取され、これらも含めた分析が有効と思われる。以下、表 1 を概観し、「回」「度」「遍」それぞれの性格を検討する。

4.1.1 地の文・会話文における出現頻度

表 1 の下部に、用例が会話文と地の文にどのくらいの割合で出現しているのかを数値で示した。

「回」 会話文 17 例 42.5% 「度」 会話文 75 例 13% 「遍」 会話文 90 例 41%
 地の文 23 例 57.5% 地の文 509 例 87% 地の文 130 例 59%

- (1) ㊦「明日っから、ここで働くんでしょか。働くとなれば、何時間水に漬かってる——漬かってれば義務が済むんですか」「そうさなあ」と考えていた初さんは、「一昼夜に三回の交替だからな」と説明してくれた。²⁾ 『坑夫』
- (2) ㊦ 自分の関係のある雑誌に、何でも好いから書けと逼るので、代助は一度面白いものを寄草した事がある。 『それから』
- (3) ㊦「知らない事ありませんが、もし御望みなら、もう一遍占ないを立て直して見て上げ

ても宜うござんす」

『彼岸過迄』

これらの数値だけを見ると、「度」は地の文で87%を占めており、書き言葉によく用いられている。「回」と「遍」は会話文の少ない小説において、地の文の比率とは大差がないことから、「回」と「遍」は「度」より会話文によく使われることが言える。

以下4.1.2と4.1.3は助数詞以外の用法となるが、表1を概観する際、便宜上ここでは、三者の拡張的用法を先に考えておく。

4.1.2 慣用用法

(4) 大刀老人は亡妻の三回忌までにはきっと一基の石碑を立ててやろうと決心した。『永日小品』

(5) それから段々を下りて来て二十間の敷石を往ったり来たり御百度を踏む。『夢十夜』

(6) 嫂でも、誠太郎でも、縫子でも、兄が終日宅に居て、三度の食事を家族と共に欠かさずふと、却つて珍らしがる位である。『それから』

「回」は2例あり、何れも「三回忌」である。「度」は14例（「御百度を踏む」2例、「三度の食事」は12例）あり、「遍」の用例は見られない。

4.1.3 副詞用法

(7) 父がこう云った時、明るい室の方に集まったものは一度にどっと笑った。（一斉に、同時に）
『行人』

(8) 「奥さんは蛇飯を召し上がらんから、そんな事をおっしゃるが、まあ一遍たべてご覧なさい、あの味ばかりは生涯忘れられませんぜ」（ちょっと、試しに）
『我輩は猫である』

用例(7)(8)の「一度(に)」「一遍」は本来の助数詞の使い方から「同時に」「ちょっと、試しに」といった意味合いの変化を伴い、副詞的用法に拡張されている。副詞的用法に関して、「回」は用例が全くないのに対し、「遍」は7例、「度」は158もあった。

以上、表1から言えることは以下の①～⑤のようにまとめられる。

①小説における三者の使用頻度は高い順から「度」>「遍」>「回」になる。伊藤(2011)による『明治の文豪』の調査結果「度」>「回」と一致する。また、飯田氏による新聞での出方を参考にすると、こういった結果は時代性と文体の性格によると考えられる。

②「一回」は回数のみを表す。「一度」「一遍」は、回数を表す場合と「一度行ってみたい」のように、特に回数にこだわらず「～してみたい、試しに～ちょっとやる」などについて使う場合もあれば、「一斉に・同時に」の意味で使う場合もある。

③「回」は数を重ね、また繰り返すという意味で、次にまた起こり得るものを数えるときに使う。慣用用法の「三回忌」のように、のちに「七回忌」、「十三回忌」と確実に訪れる、時間の経過に伴って再びめぐってくることを数える。

④「度」には慣用表現が多い。「お百度を踏む」などから推察されるように物事が度重なっていくことはあっても、直接時間とは関係なく、次に起こり得るか予想が難しい場合などに使う傾向が見られる。

⑤地の文と会話文に出現する頻度から見ると「度」は最も硬く、書き言葉的なもので、「回」と「遍」は話し言葉にもよく使われるという文体上の差異がある。

なお、③と④は飯田氏の研究でも言及されている。特に「回」の連続性について、少なくとも近

代から現代に至るまで有効であると思われる。

4.2 数量的観点で見る数詞との共起

助数詞の前項が数詞であるが、文脈によってその数詞の分布に差が認められる。ここでは、数詞における三者の差異を考える。「回」「度」「遍」の数詞との共起関係を以下の表2にまとめた。また、「三、四回」のような数詞が不確定の場合（「3、4」と表記）と「三回四回」のような数詞が連続している場合（「3,4」と表記）の使用状況を表3で示した。

表2: 「回」「度」「遍」と共起する数詞の分布 (その1)

助数詞 \ 数詞	1	2	3	4	5	10	18	50	60	61	62	63
回 (40例)	9	2	2			1			4	1	2	1
度 (584例)	188	57	50	1			1	1	1			
遍 (220例)	112	10	2	1	1	1						

- (9) 「同志だけがよりましたでせんだってから朗読会というのを組織しまして、毎月一回会合してこの方面の研究をこれから続けたつもりで、～」 『我輩は猫である』
- (10) 一度流産すると癖になると聞いたので、御米は万に注意して、つつましやかに振舞っていた。 『門』
- (11) 実を云うと、僕はこの高木という男について、ほとんど何も知らなかった。ただ一遍百代子から彼が適当な配偶を求めつつある由を聞いただけである。 『彼岸過迄』

表2から言えることは、

⑥数詞との共起関係から見ると、「回」は全体の用例数が極めて少ないにも関わらず、数詞と幅広く共起している。一方「度」³⁾と「遍」は「一度」「一遍」の用例に偏り、数を数える場合に、広く数と共起して生産的に用いる性質はないと言える。

この点については伊藤(2010)でも、明治期の雑誌（『明六雑誌』『国民之友』）の「回」「度」の二桁以上の数での用例を見ると「回」:「度」は約3:1の割合であり、「回」の方が使われやすいことと「度」の生産性が低下していることを指摘している。

表3: 「回」「度」「遍」と共起する数詞の特徴 (その2)

助数詞 \ 数詞	数詞が不確定 (例「三、四回」)					数詞が連続している (例「三回四回」)				
	1、2	2、3	3、3	3、4	4、5	15、6	2、3	3、3	3、4	62、63
回 (40例)	2	1		3	1	1			1	1
度 (584例)	23	107		1			3	3 ⁴⁾	1	
遍 (220例)	1	4			5					

- (12) 六十二回六十三回、回を重ねるにしたがってどうしても期日がくれば十円払わなくては気が済まないようになる。 『我輩は猫である』
- (13) 文鳥は膨らんだ首を二三度豎横に向け直した。 『文鳥』
- (14) 自分はこの怪しい音を約四五遍聞いた。 『永日小品』

表3から言えることは、

⑦数詞が不確定の場合においては「一、二度」「二、三度」のように「度」の使用が最も多いことから、ある動作・行為が次に起こるか確実でない時に「度」の使用が好まれる。また、数詞が連続

している場合においては「遍」が全く用いられていないことから、「遍」は計数意識が最も弱く、連続性を持たないことが言える。

4.3 意味分野における「回」「度」「遍」の分布

ここでは「回」「度」「遍」で数える動作を田島毓堂(1999)「意味分野別構造分析」の方法で、個々の語に『分類語彙表』⁵⁾の意味分類コードを与え、この意味のカテゴリー化された表に照らし、語彙の意味を分析する。どの意味分野に属する語が何語あり、さらに何回使われているのかを語彙の「意味分野別構造」をもとに考えたい。表4の各項目に示している動詞の例はどれも「回」「度」「遍」で数えられる代表的なものである。

表4：意味分野における「回」「度」「遍」の分布

単語コード		用の類< 2. >			
分類	主たる意義	「回」	「度」	「遍」	
抽象的關係	2.10	事柄			
	2.11	類			
	2.12	存在		15 (失う、成立する)	
	2.13	様相		3 (なる、絞める)	
	2.14	力			
	2.15	作用	8 (通う、重ねる)	204 (繰り返す、重なる)	71 (繰り返す、取り出す)
	2.16	時間		2 (時間をつぶす、臨む)	
	2.17	空間	1 (向ける)	2 (向ける、向う)	
	2.18	形			
2.19	量				
人間活動の 主体					
人間活動— 精神および 行為	2.30	心	2 (怠ける、試す)	82 (聞く、思う)	44 (聞く、考える)
	2.31	言語	1 (書く)	39 (見る、述べる)	38 (言う、話す)
	2.32	芸術		3 (鳴らす)	
	2.33	生活		53 (食う、寝る)	17 (食う、深呼吸する)
	2.34	行為	2 (奔走する、注意を受ける)	20 (する、やる)	5 (行く、やる)
	2.35	交わり	4 (会合する、顔を合わせる)	31 (出会う、顔を合わせる)	23 (会う、訪問する)
	2.36	待遇		7 (世話する、勧める)	5 (願う、頼む)
	2.37	経済	8 (払う、上げる)	12 (借りる、寄付する)	4 (勘定する、誂える)
2.38	事業		10 (運ぶ、使う)	2 (給仕をする、植える)	
生産物 および用具					
自然物 および 自然現象	2.50	自然		4 (鳴る、響く)	1 (音がする)
	2.51	物質		1 (潤す)	
	2.52	天地			
	2.53	生物			
	2.54	植物			
	2.55	動物			
	2.56	身体			
2.57	生命		5 (死ぬ、流産する)	1 (卒倒する)	
合計		26	492	211	

回：(15) それまで彼は大的英語嫌であったのに、この書物を読むようになってから、一回も下読を
怠らずに、あてられさえすれば、必ず起立して訳を付けたのでも、彼がいかにそれを面白

がっていたかが分る。 『彼岸過迄』

(16) ～一日に二三回位怖々ながら試してみるうちに、何うやら、ウエーバーと同じ様になりさうなので、急に驚ろいて已めにした。 『それから』

(17) まだ、かじかんで仕事をする気にならない。実を云うと仕事は山ほどある。自分の原稿を一回分書かなければならない。 『永日小品』

度：(18) 「よほど衰弱している証拠であろう、しかし衰弱せんでもあの女の夢なら見るかも知れん。旅順へ来てからこれで三度見た」 『趣味の遺伝』

(19) 芝居場で一度考えた通り、もし今夜あの夫人に会わなかったなら、最愛の夫に対して、これほど不愉快な感じを抱かずにすんだろうにという気ばかり強くした。 『明暗』

(20) 自分は全く想像がつかないので、全体どんな話なんですかと二三度聞き返したが、～。 『行人』

度：(21) 立つ前にもう一遍様子を見て、それから東京を出やうと云ふ気が起つた。 『それから』

(22) 「じゃ、まあ御待ちなさい、先生。もう一遍小野に話して見ますから。僕はただ頼まれたから来たんで、そんな精しい事情は知らんのですから」 『虞美人草』

(23) 「なに何にも云やしないよ。嘘だと思ふなら、もう一遍お延さんに訊いて見たまえ」 『明暗』

以上、表4から言えることは以下の⑧～⑩のようにまとめられる。

⑧「回」は全体の用例数が少ないが、「度」と「遍」と同じく回数を数える助数詞として「人間活動—精神および行為」の項目に最も多く出現している。

⑨「自然物および自然現象」の項目に「回」の用例は1例もない。「度」と「遍」2.50にそれぞれ4例と1例あり、数えている動作は「鳴る(3例)」、「響く」、「音がする」がある。また、2.57においては「度」と「遍」はそれぞれ5例と1例、数えている動作は「死ぬ(2例)」、「流産する」、「咳がでる」、「傷つく」、「卒倒する」がある。この項目における「度」と「遍」はその場限りのことで、非意志的なものが多く出現している。一方、「回」は前述した連続性を含意するため、「死ぬ」「流産する」などは勿論、回数を最初から設定したわけではなく偶然に起こる事は数えにくい。

⑩「度」と「遍」は2.30と2.31において「考える、思う、言う、話す、聞く、見る」といった知覚動詞と共起することが多い。例えば、用例(18)～(23)のように、「度」には「見る、考える、聞き返す」、「遍」には「見る、話す、聞(訊)く」といった知覚動詞がある。「度」と「遍」における動詞の特徴としては知覚や感覚を表すものが多く、予定せず臨時的に行う印象を受ける。それほど回数にこだわらず、その場かぎり、また起きるかもしれないというニュアンスが含まれている。また、用例(15)～(17)のように、「回」には「下読をする、原稿を一回分書く」のような動作があり、これらの動作は一回で済むようなことではない。予め示唆されている或いは設定されているため、「回」の連続性につながる。

4.4 コロケーションから見る「回」「度」「遍」の使用

ここで、文中における他の文要素との共起関係から三者の性格を考察する。それぞれのコロケーションの類型は「回」14種、「度」42種、「遍」26種であり、その中から類型数の多いものを表5にまとめた。以下、代表的な類型を順番に検討していく。

表5:「回」「度」「遍」のコロケーション

助数詞	用例数	*も～ない	疑問*～	第～*	～*分	～*目	もう*～	時間名詞*	ただ*～	副詞用法
			何度 何遍	第～回	～回分	～度目 ～遍目		生涯に一度 月に一度		一度に 一遍に
回	40	△3	×	△6	△1	×	×	△7	×	×
度	584	○22	○71	×	×	○34	△11	○33	△6	○154
遍	220	△4	○77	×	×	△3	○63	△8	△9	△7

※ *→助数詞、○→用例が多い、△→用例が少ない、×→用例がない。

【*も～ない】

「*も～ない」の形は全て数詞「一」と共起し、否定を強調する表現である。「回」の3例、「遍」の4例に対して、「度」は22例もある。「度」は否定表現との結び付きが最も強い。

(24) 家へはその後一回も足を向けなかった。家からも誰一人尋ねて来なかった。『行人』

(25) 自分はHさんの悪口を云う兄の言葉を、今までついで一度も聞いた事がなかった。『行人』

(26) 二三度自分の前を横切ったけれどもけっして一遍もその眼を上げて自分を見なかった。

『行人』

【疑問*～】

「疑問*～」は「何度」「何遍」のような回数をはっきりとしない場合である。「回」は全体の用例数が少ないため、普段よく使われる「何回」は1例も採取できなかったが、「何回」は同じ内容の事態が何回も起こるというニュアンスが含まれるのに対し、(27)(28)のように、「度」と「遍」は内容が違っていても、その独立したものを一つ一つ数える意味合いがある。

(27) この老いた父と、こう肩を並べて歩いた例は近頃ととなかった。この老いた父とこれから先もう何度こうして歩けるものかそれも分らなかった。『行人』

(28) 「進行しなければやり直すだけだ。君のように余計な事を考えてるうちには何遍でもやり直しが出来るよ」となおささと行く。『虞美人草』

【第～*】・【～*分】

「第～*」「～*分」はどちらも「回」としか共起することができない。「第」は「度」と共起できないことは飯田氏にも言及されている。用例(29)のように、朗読会は第一回だけで済むのではなく、二回目も予定されているため、「回」に連続性があることはここでも確かめられる。また、用例(30)「原稿を一回分書く」ことも予定されているため、「一度分(×)」「一遍分(×)」などとは言えない。つまり、「回」には連続性を含意するため、量的に一定の範囲がある。

(29) 第一回としては成功だと称する朗読会がこれでは、失敗はどんなものだろうと想像すると笑わずにはいられない。「第二回からは、もっと奮発して盛大にやるつもりなので、今日出ましたのも全くそのためで、実は先生にも一つ御入会の上御尽力を仰ぎたいので」

『我輩は猫である』

(30) まだ、かじかんで仕事をする気にならない。実を云うと仕事は山ほどある。自分の原稿を一回分書かなければならない。『永日小品』

【～*目】

「～*目」は「度」との共起が最も多い。用例(31)「嫁ぐ」という動詞は回数を設定してするものではないため、連続性を持たない「度」が相応しい。「度」は全体が予定されておらず、量的には起こったきりで、範囲がない。また(32)「初めては驚いたが、二遍目は喜んだ」のように、「遍」は

独立したものとして、その都度、それぞれの様子について話している。

(31) 島田と別れてから二度目に嫁ついた波多野と彼女との間にも子が生れなかったので、二人は或所から養女を貰って、それを育てる事にした。 『道草』

(32) 始めて、こんな感覚があった時は驚ろいた。二遍目は寧ろ新奇な経験として喜んだ。 『それから』

【もう*~】

「もう*~」は「もう一遍」の使用が圧倒的に多い。「もう」と共起するとき、その数詞は全て「一」となっており、回数を数えるというより内容の違う事物を個別に扱っているような印象を受ける。(32) (33) のように、「手紙を出す」「考える」という動作は変わらないが、手紙の内容や考え方は違っていても「遍」で数えられる。

(32) 「もう一遍手紙を出してご覧な」と母がいった。 『ころ』

(33) 「貴方にそれ程御都合が好い事があるなら、もう一遍考へて見ませう」と答へた。 『それから』

【時間名詞*】

「時間名詞*」について、伊藤(2010)は「回」には「毎月一回」や「一日に五回」といった頻度を表す表現が多いと言及している。今回の調査した用例から分かるように、「回」は時間の幅が比較的短く、同じ事を予定して繰り返している意味合いが含まれている。一方、「度」と「遍」は時間の幅が比較的長く、予定しておらず、たまたま起こる、その場限りの意味合いがある。

(34) 一日に二三回位怖々ながら試してゐるうちに、何うやら、ウエーバーと同じ様になりさうなので、急に驚ろいて已めにした。 『それから』

(35) 凄まじき喰い違いの方が生涯に一度起るならば、われは幕引く舞台に立つ事なくして自からなる悲劇の主人公である。 『虞美人草』

(36) 「いやー珍客だね。僕のような狎客になると苦沙弥はとかく粗略にしたがっていかん。何でも苦沙弥のうちへは十年に一遍くらいくるに限る。 『我輩は猫である』

【ただ*~】

「ただ*~」については、「回」は全く用例がないのに対し、「度」と「遍」はそれぞれ6例と9例ある。よって、「度」と「遍」は限定を強調する表現と共起しやすいと言える。

(37) 彼は産についての経験をただ一度しか有っていなかった。 『道草』

(38) 入口であら姐はんという感投詞を用いたものもあったが、それはただの一遍に過ぎなかった。 『坑夫』

以上、表5から言えることは以下の⑪~⑭のようにまとめられる。

⑪ 「第~」「~分」は予定されたことを数えるため、「回」としか共起できない。

⑫ 「~目」と共起するとき、「度」「遍」は全体が予定されておらず、その都度のニュアスが強い。

⑬ 「時間名詞」(「一日に~」「生涯に~)と共起するとき、「回」は時間の幅が比較的短く、必然的な行為が多い。「度」「遍」は時間の幅が比較的長く、偶然的な行為が多い。

⑭ 「も~ない」「ただ~」と共起するとき、それぞれ「否定」と「限定」を強調する。強調の意が強い順から「度」>「遍」>「回」となる。

5. まとめ

本稿では、先行研究を踏まえ、夏目漱石⁶⁾の作品から用例を採取し、「回」「度」「遍」の出現頻度・数詞との共起関係・意味分野における使用状況を検討した。また、コロケーションの観点から文中における文要素との共起関係についても考察した。近代小説における「度」の使用が優勢であることや数詞と共起するとき、「度」の生産性が低いといった点は伊藤(2011)と合致している。また「回」の連続性については、近代から現代(飯田氏の調査結果)に至るまで存続していることが明らかになった。

「回」「度」「遍」は一見、同じ意味を表すと思われるような助数詞でも厳密には一致しないことがあると指摘した。それは意義素にかかわるものとして、「回」は次がある事を意識している・予定している・示唆した上での使い方であるのに対して、「度」と「遍」は独立したもので、その場限りであり、再び起こり得るかもしれないという意味合いが含まれる。特に「遍」は全体が予定されていなく、その都度、それぞれについて言うニュアスが強く、連続性が最も弱い。図で示すと以下のようになる。

—————>一回目—————>二回目—————>三回目 (回：事を予定している)

—————>一度／遍・・・>二度／遍?・・・>三度／遍? (度と遍：事を予定していない)

—————>一遍 (遍：連続性が最も弱い)

「回」「度」「遍」それぞれの意義素と漱石の小説における特徴は以下のようにまとめた。

(○→用例が多い、△→用例が少ない、×→用例がない)

助数詞	出現頻度	文体		助数詞以外の用法	
	回数	地の文	会話文	慣用	副詞
回	40 (弱)	○ ⁻	○	△	×
度	584 (強)	○ ⁺	△	○	○
遍	220 (中)	○ ⁻	○	×	△

助数詞	数詞との共起			意味分野		
	一般の数詞	不確定な数詞	連続する数詞	性格	意志動詞	知覚動詞
回	幅広い、生産的	△	△	必然的・連続的	○	△
度	「一」に偏る、非生産的	○	△	偶然的・臨時的	△	○
遍	「一」に偏る、非生産的	△	×	偶然的・臨時的	△	○

助数詞	コロケーション
回	量的に範囲がない、時間の幅が短い、反復性 「第」「全」と共起しやすい
度	量的に範囲がある、時間の幅が長い、偶然性、個別的、否定・限定の意が強い 「目」と共起しやすい
遍	量的に範囲がある、時間の幅が長い、偶然性、個別的 「もう～」と共起しやすい

注

- 1) 夏目漱石の小説（全 24 作品・約 316 万字）は作品数が多く、内容も多様性に富む。また、国語科教科書などに取り上げられ、社会一般に広く認められるものとして重要な言語資料であると考えられる。
- 2) 本稿に取り上げた用例は全て原文を引用したものである。また、用例の内容が長すぎる場合、適宜一部を省略する。省略した内容を「～」で示す。
- 3) 「度」には「二度と～ない」「三度の食事」のような慣用的表現が多い。これらの用例を除き、単純に数詞と共起している場合はやはり「一」に偏る。
- 4) 「3,3」の用例は以下の通りである。
 1. 我々は爺さんに頼んで近所の宿屋から三度三度食事を運んで貰う事にしました。
 2. それから東京へ出立には飯が非常に旨いので、腹を据えて食い出すと、大抵の宿屋は叶わない、三度三度食っちゃ気の毒だと云うような事を話して、また皆を笑わした。
 3. あの中に南京米の炊いたのがいっぱい詰ってるのかと思ったら、——何しろ自分が三度三度一箇月食っても食い切れないほどの南京米なんだから、食わない前からうんざりしちまった。
- 5) カテゴリー化した意味の一覧である『分類語彙表』は意味分野別語彙構造分析法における基準として適切なものである。
- 6) 今回の調査は夏目漱石の小説を中心に考察したが、作家によって個人差が出てくると思われるので、森鷗外の小説（26 作品）における「回」「度」「遍」の使用状況も調査した。同じような使用傾向が出てきたため、夏目漱石の小説だけでも近代小説における「回」「度」「遍」の様子が窺えると考えられる。

参考資料

- 新潮社（1997）『新潮文庫明治の文豪』（CD-ROM 版）
 国立国語研究所編（2004）『分類語彙表』大日本図書

参考文献

- 飯田朝子（1999）『日本語主要助数詞の意味と用法』東京大学大学院人文社会系研究会博士論文
 伊藤由貴（2010）「近世・近代における助数詞「回」—行為や出来事を数える用法を中心に—」第 273 回日本近代語研究会春季大会発表レジュメ
 伊藤由貴（2011）「近世・近代における助数詞「回」について—行為や出来事を数える用法を中心に—」『語文』97, pp.54 - 66
 田島毓堂（1999）『比較語彙研究序説』笠間書院

付記

本稿は平成 24 年度公益信託田島毓堂語彙研究基金による成果の一部である。

（本学大学院博士後期課程）